近現代文学における絹産業の描出

群馬県立女子大学大学院文学研究科日本文学専攻１年　**中島　瑞季**

１　研究の実施状況

（１）研究期間　2020年８月～2021年１月

（２）実施場所　群馬県立女子大学／高山社跡、藤岡市歴史館、群馬県立歴史博物館

（３）参加人数　１名

（４）研究内容

・近現代文学の諸作品における養蚕語彙の表象を整理し検討することで、養蚕という絹産業の文化がどのような形で展開し、根付いていたのかを考察した

・明治期にいち早く養蚕の隆盛をきわめた群馬県に根付く作家と、その隆盛にやや遅れをとった地域である北東北をはじめとした土地に根付く作家の描述を照らし合わせることで、文学における絹文化の描かれ方の個別性を検討した

・養蚕業の隆盛、衰退という時代の流れと文学作品の中での描述を照らし合わせて表現を検討し、養蚕が人々にとってどのような産業として捉えられていたのかを検討した

２　研究の成果

研究成果の詳細は、別添の研究成果報告書の通りである。研究成果を箇条書きにして示せば以下の通りである。

・Microsoft Excel を用いて用例をデータベース化し、合計 165 例を収集した

・養蚕語彙を含む用例を文学の中の表現として考察したところ、養蚕語彙には読者に特定のイメージを共有させ、作品の解釈を深める効果があることが分かった

・全国における養蚕の推移と文学作品の発表年代を照らし合わせることで、養蚕業の盛衰と作品で描かれる養蚕語彙から想起されるイメージに重なりが見出せることが分かった

残した課題は以下の通りである。

・養蚕語彙が含まれる文学作品の収集とその表現の検討を続け、養蚕語彙が文学の表現に与える影響を考察する

・実地調査を行うことでそれぞれの土地の養蚕業の状況を整理し、地域及び年代における文章表現の違いを明確化する

【別添報告書】

近現代文学における絹産業の描出

1．研究の目的

通常は絹産業という専門的な場で用いられる語彙、すなわち養蚕語彙が、文学作品の中に現れることがある。その養蚕語彙は、それぞれの文学作品の中で絹産業を説明しているわけではなく、ある作品の世界を創り上げるための要素となってはたらいている。

本研究では、それらの１つ１つを具体的に検討し、文学作品において養蚕語彙が描述している世界を明らかにする。それによって、養蚕語彙を用いて文学作品を描き出した作家と、それを受容する読者が生きている生活の中に、絹文化がどのような形で根付いていたのかを解明する。

藤岡歴史館での調査の様子

高山社跡での調査の様子

研究室での調査の様子

研究室での調査の様子

２．研究の内容

はじめに、本研究で検討することがらについて、その概略を述べる。

・近現代文学の諸作品における養蚕語彙の表象を整理し検討することで、養蚕という絹産業の文化がどのような形で展開し、根付いていたのかを解明する。さらに、養蚕語彙が用いられている文学作品の解釈を検討する。
・明治期に養蚕の隆盛をきわめた群馬県に根付く作家と、その隆盛にやや遅れをとった地域に根付く作家の描述を照らし合わせることで、絹文化の展開を文学の側面から検討する。本稿では、群馬県に根付く作家として萩原朔太郎、伊藤信吉を取り上げ、北東北に根付く作家として小林多喜二（秋田県）、太宰治（青森県）を取り上げる。
・日本全国における養蚕業の隆盛、衰退という時代の流れと文学作品の中での描述を照らし合わせて表現を整理し、養蚕が人々にとってどのような産業として捉えられていたのかを検討する。

３．調査の方法

本研究における調査の方法は以下の通りである。

・青空文庫の用例検索機能[(1)]を用いて近現代文学における養蚕語彙を抽出し、文学全集を用いてその表現を収集する。
・検索する語彙は、養蚕に深い関わりを持つことばとして「蚕」「桑」「繭」「真綿」の４語とした。
・青空文庫での用例検索が不可能な伊藤信吉の作品に関しては、群馬県に関わる詩が収録されている詩集および作品集[(2)]を用いて用例の収集を行った。
・得られた表現のすべてを、Microsoft Excelに入力しデータベース化を行った。

４．用例データベースについて

抽出した用例はデータベース化し、以下のように整理した。

・用例の収集にはMicrosoft Excelを使用した。分類の枠組として「意味分野」「語彙」「語形」「作品名」「作家」「発表年」「引用元」「（引用元の）ページ数」「用例（本文）」の項目を用いた。
・収集した用例は全体で165例あり、意味分野ごとに分類すると「蚕」が86例、「桑」が64例、「繭」が13例、「真綿」が２例見つかった。
・収集した用例を作家ごとに分類すると、伊藤信吉が132例、宮沢賢治が16例、太宰治が８例、小林多喜二が４例、萩原朔太郎が３例、谷崎潤一郎が２例見つかった。

５．作品の解釈

本稿ではデータベースの用例の中から、小林多喜二・太宰治・萩原朔太郎・伊藤信吉の作品を取り上げ、その表現から養蚕語彙の描出の様相を検討する。

（1）小林多喜二の作品から

小林多喜二の「蟹工船」は、1929（昭和４）年５月・６月に雑誌「戦旗」に発表された。労働者階級の人間の苦悩を描いた、プロレタリア文学の代表的な作品である。作品の前半、労働法規が適用されない船内という苛酷な環境で仕事に従事する労働者たちが、その日の労働を終えて寝床へ戻ってくる場面で次のような記述がある。（引用の際に、本稿で取り上げる養蚕語彙に傍線を付した。本稿で引用する作品の傍線はすべてこれによるものである）

> 仕事が終ると、皆は「糞壺」の中へ順々に入り込んできた。手や足は大根のように冷えて、感覚なく身体についていた。皆は<u>蚕</u>のように、各ゝの棚の中に入ってしまうと、誰も一口も口をきくものがいなかった。

ゴロリ横になって、鉄の支柱につかまった(3)。

引用における「糞壺」とは、作中で「薄暗い船底の棚」と示されている、労働者たちの居住空間と考えられる。この「糞壺」で身体を休める労働者の様子が「蚕」に重ねられているのである。

「皆は蚕のように、各ゝの棚の中に入ってしまうと、誰も一口も口をきくものがいなかった。」という語りは、労働者が１人ずつ棚に並んで寝転ぶ様子が蚕棚に１匹ずつ蚕が並んでいる様子に重ねられており、労働者に与えられた寝床の窮屈さが端的に示されている(4)。また、棚の中にいる蚕がほとんど動かない様子が想起されることで､疲労ゆえに身動きが取れない労働者の様子が鮮明に思い浮かべられるのである。この場面において、労働者の姿に「蚕」が重ねられることで、労働者たちの睡眠が、安眠とは程遠い労働のための一時の休息であることが強調されていると言える。

さらに作品の後半では、雇用者である「浅川監督」の暴力や虐待に耐えかねた「芝浦の漁夫」による語りが次のように展開される。

芝浦の漁夫が、「馬鹿！」と、横から怒鳴りつけた。「殺されるッて分ったら？　馬鹿ア、何時だ、それア。──今、殺されているんでねえか。小刻みによ。彼奴等はな、上手なんだ。ピストルは今にもうつように、何時でも持っているが､なかなかそんなヘマはしないんだ。あれア「手」なんだ。──分るか。彼奴等は、俺達を殺せば、自分等の方で損するんだ。目的は──本当の目的は、俺達をウンと働かせて、締木にかけて、ギイギイ搾り上げて、しこたま儲けることなんだ。そいつを今俺達は毎日やられてるんだ。──どうだ、この滅茶苦茶は。まるで<u>蚕に食われている桑の葉</u>のように、俺達の身体が殺されているんだ(5)」

ここでは「蚕に食われている桑の葉」という比喩によって、雇用者と労働者の不平等な関係が表現されている。蚕によって桑の葉が元の形が残らないほどに勢いよく食べ尽くされる様子が、労働者が劣悪な労働環境の中、殺される寸前まで働かされている様子に重ねられているのである。

作品の前半では、労働者の睡眠の様子が「蚕」に重ねられたが、この場面では搾取する立場の雇用者に対して「蚕」の比喩が用いられている。この点からは、労働者を支配する雇用者もまた雇われた人間であり、資本主義に支配されている卑小な存在であるという解釈が可能になる。２つの場面において「蚕」という共通のイメージが用いられることで、別の立場として描かれている労働者と雇用者が同じ〈労働階級〉に属する存在として一括されているのである。

このように、小林多喜二の「蟹工船」では「蚕」が比喩に用いられることで、労働環境の劣悪さや、労働者と雇用者の関係性が強調されている。さらに、沿岸部の労働としての蟹工船と、内陸部の労働としての養蚕業が重ねられることで、過酷な労働というイメージを読者と共有できるようになっているのである。

（２）太宰治の作品から

続いて、太宰治の作品における用例を検討する。先述した「蟹工船」と同じように養蚕語彙が比喩として用いられている例として、1941（昭和16）年１月に「文学界」に発表された「東京八景」が挙げられる。太宰治と想定される語り手が、東京で過ごした10年間を思い出の土地と共に追想する作品であるが、その冒頭において、語り手が「東京市の大地図」を広げながら次のように述べる場面がある。

隅田川。浅草。牛込。赤坂。ああなんでも在る。行こうと思えば、いつでも、すぐに行けるのだ。私は、奇蹟を見るような気さえした。今では、此の<u>蚕に食われた桑の葉</u>のような東京市の全形を眺めても、そこに住む人、各々の生活の姿ばかりが思われる。こんな趣きの無い原っぱに、日本全国から、ぞろぞろ人が押し寄せ、汗だくで押し合いへし合い、一寸の土地を争って一喜一憂し、互に嫉視、反目して、雌は雄を呼び、雄は、ただ半狂乱で歩きまわる(6)。

ここでは「蚕に食われた桑の葉」という比喩によって、東京の土地が人々によって余すところなく侵食されている様子が示されている。蚕が桑の葉を勢いよく食べ尽くす様子を重ね合わせると、東京の土地が猛烈な速さで開拓された様子も思い浮かべられるだろう。

さらに、この作品が昭和16年１月に発表されたことを踏まえると、戦争の長期化により荒廃した土地の様子を想定することも可能である。このように、作品に「蚕に食われた桑の葉」の比喩が加えられることで、東京の様子と桑の葉の見た目のイメージが重ねられるとともに、土地が猛烈な勢いでむしばまれている様子が読み

取れるようになっている。
続いて、「桑の実」の語が作中で用いられている例を２例検討する。１つ目は1939（昭和14）年に「文学界」に発表された「皮膚と心」である。ある時突然皮膚に現れた「小豆粒に似た吹出物」に不安感を覚える女性の一人語りで展開される作品であるが、語り手の女性は自身がどんなに皮膚病を嫌悪しているかを説明するために次のように述べる。

> 私は、菊の花さえきらいなのです。小さい花弁がうじゃうじゃしていて、まるで何かみたい。樹木の幹の、でこぼこしているのを見ても、ぞっとして全身むず痒くなります。（中略）グミの実、桑の実、どっちもきらい。お月さまの拡大写真を見て、吐きそうになったことがあります[7]。

ここで語り手の女性は、自身が皮膚のかゆみを最も嫌っていることを説明するために、見ていると痒みを抱くようなもの（現代では集合体と呼ばれるような存在）を羅列する。引用において「桑の実」は語り手に不快感を与える存在として描かれており、小さな粒が集まった桑の実のイメージが読者と共有できる前提でこの描写がなされたことが伺える。
２つ目は1941（昭和16）年に「新女苑」に発表された「令嬢アユ」である。作品の語り手である「私」は、友人である東京の大学の文科生の「佐野君」が伊豆の温泉宿で「いいひとを見つけて来た」とそこで出会った令嬢の話をするのを聞く。しかし「佐野君」が語る令嬢の様子から、「私」は令嬢の正体が娼婦であることに気付き、それゆえに「私」は「佐野君」の結婚に賛成することができない、という形で作品が展開する。次に引用するのは、「佐野君」が語る、令嬢と鮎釣りをした際に令嬢が川に落ちてしまった場面の会話である。

> 「血が！」
> 令嬢の胸を指さした。けさは脚を、こんどは胸を、指さした。令嬢の白い簡素服の胸のあたりに血が、薔薇の花くらいの大きさでにじんでいる。
> 令嬢は、自分の胸をうつむいてちらと見て、
> 「桑の実よ。」と平気な顔をして言った。「胸のポケットに、桑の実をいれて置いたのよ。あとで食べようと思っていたら、損をした[8]。」

この描写からはいくつかの対比構造を見出すことが出来る。令嬢が着る「白い」簡素服ににじむ「血」の赤色という〈色〉の対比や、令嬢が川に落ちて怪我をしたと思い気が動転する「佐野君」と、終始落ち着いた様子の令嬢という〈態度〉の対比が筆頭に挙げられるが、令嬢の服ににじんだ染みを「薔薇の花」と形容する「佐野君」と、その正体が「桑の実」だと告げる令嬢の対比は、作品の核である２者間の〈格差〉を端的に表現するものとなっている。
東京の大学の文科生である「佐野君」は、令嬢の服に広がる染みが「桑の実」であることに想像が至らず、「薔薇の花」という華やかな形容を用いてそれが「血」だと勘違いをする。それに対し伊豆で生まれ育った令嬢は、「佐野君」の焦りには気を留めず「平気な顔」で染みの正体が「桑の実」がつぶれたものであることを告げる。この会話によって、東京で生活する大学生の「佐野君」と、伊豆で生活する娼婦の令嬢の暮らしの違いや、２人が相容れない関係であることが表現されているのである。
さらに、令嬢が桑の実がつぶれたせいで服が汚れたことには一切言及せず、「あとで食べようと思っていた」から「損をした」と述べる点も印象的である。ここからは、令嬢にとって「桑の実」が食べ物として身近な存在であり、日常に根付いたものであることが読み取れるとともに、令嬢にとって服が汚れることは大したことではないという超然とした態度が表れている。
この作品には、題にもなっている「アユ」をはじめ、「薔薇」「桑」といった〈初夏〉を象徴するモチーフが多く描かれている。「佐野君」と「令嬢」は同じ〈初夏〉を生きていながらも、それぞれの〈日常〉が決定的に異なっている様子が「桑の実」をめぐる会話によって示されているのである。

（３）萩原朔太郎と伊藤信吉の作品から

続いて、群馬県にゆかりのある作家として、詩人の萩原朔太郎と伊藤信吉の作品を取り上げ、その表現を検討する。まずは萩原朔太郎の作品についてである。朔太郎が作品に養蚕語彙を読み込んでいる例は３例あるが、そのうちの２例が似通った風景を描写している点に注目したい。まずは1914（大正３）年に「地上巡礼」に発表された「廐（うまや）」の一節を次に引用する。

ここは利根川、
その氾濫のながめいちじるく、
青空に桑の葉光り、
さんらんとして遠き山里に愁をひたす、
あはれ、あはれ、われの故郷（ふるさと）にあなれば、
この眺望のいたましさ[9]。

続いて1938（昭和13）年に「四季」に発表された「物みなは歳日と共に亡び行く」の一節を引用する。

利根川は昔ながら流れて居るが、雲雀の巣を拾つた河原の砂原は、原形もなく変つてしまつて、ただ一面の桑畑になつてしまつた[10]。

引用した「廐」「物みなは歳日と共に亡び行く」はいずれも、朔太郎が生まれ故郷である前橋に帰った際の風景を描いた詩となっている。朔太郎は大正２年、昭和12年に前橋を訪れているため[11]、その際の風景が詩に描写されたと考えられるが、離れた時期に発表されたこの２作において、「桑」の風景が「利根川」とともに語られており、かつて自分が見ていた風景が変わり果てた後の光景として「桑の葉」と「桑畑」が描かれている点は注目に値する。利根川は明治23、27、29、31、43年および昭和10年に大きな洪水によって氾濫が起こった記録が残されており[12]、それによる土地の変化によって桑が育てられるようになった背景が想像できる[13]。この２つの例からは、朔太郎の郷愁の風景には「桑」が存在していなかったことが読み取れる。

続いて、伊藤信吉の作品について検討する。前橋の養蚕農家に生まれた信吉は、作家人生の中で養蚕に関わる作品を多数発表している。本研究のデータベースにおける用例165例のうち、信吉の作品の用例が132例を占めていることからもその分量は圧倒的である。のちに詳述するが、信吉の幼少期は養蚕業が急速に発達した時期と重なっており、信吉自身が「右をみても左をみても蚕飼いの家ばかりだから、子供たちの感覚も、おのずから蚕と桑のにおいに染まる[14]」と述べているように、信吉の郷愁の風景には養蚕が大きく関わっていると考えられる。本稿では、伊藤信吉作品と養蚕の関わりを３つの観点から考えてみたい。

１つ目は、信吉が作品に養蚕業の実態や養蚕に携わる人間の苦しみを描き出している点である。1933（昭和８）年１月に刊行された『故郷』に収められた「霜」には、次のような描写がある。

春蚕は十二枚ほど掃立てるつもりだったが　二枚もむづかしい
去年は繭のバカ安で気がくさり　今年はせめて四、五円にしたいと話とつたが　安値の三円のあてもなくなつた
弱り目にたたり目か
（中略）
今年は蚕ができねば　他村（よそ）へ出稼ぎに行かねばなるまい[15]

「霜」という題が示すように、この詩では霜によって桑畑の桑がしおれてしまい、その結果蚕が育てられずに収入が減り、その家の生活が切迫する様子が描かれている。養蚕業が天候や自然現象に振り回される非常に不安定な産業であることが示されている。

また、1992（平成４）年９月に刊行された『上州おたくら――私の方言詩集』に収められた「さすらい」には、次のような描写がある。

糸価安定融資保償法といった政策施行の一九二九、三十年の当時、
養蚕・製糸の上州は
農家が喘いだ。
経済があえいだ。
彼はどこの村から流れ出たか[16]。

ここでは1992年の時点からおよそ60年前の1930年を振り返り、政策に翻弄される養蚕農家の姿が描写されている。「さすらい」で描かれるのは、先述した「霜」が発表された時期と重ねられるが、「霜」では養蚕業に従

事する当事者の立場からその苦しみが表現されていたのに対し、「さすらい」では、当時を振り返り客観的な立場から養蚕農家の苦しみが描かれている。このような詩の語られ方からも、時代における信吉の養蚕との距離感が伺えるようである。

２つ目は、信吉が「桑の実」の〈味〉について詩を残している点である。信吉の作品からは「桑」の例も多く見つかったが、その中でも桑の実を食べることについては特徴的な描写が見られる。『上州おたくら――私の方言詩集』に収められた「桑 上州は桑原十里の実を喰うべて唇を朱に染めばや」の一節を次に引用する。

桑の実。方言は
ドドメ。
甘味の飢えが
そいつを子供たちに喰べさせた。
郷愁の味だと？　そんなしゃれた舌ざわりであるものか[17]。

引用からは、信吉の幼年時代、子供たちが桑の実を日常的に食べていた様子が読み取れる。養蚕業の隆盛によって桑畑が広がった町で、桑の実は信吉をはじめとした子供たちにとって身近な存在であったと考えられるが、その桑の実の味については「郷愁の味だと？　そんなしゃれた舌ざわりであるものか。」と一蹴している点が印象的である。信吉にとって桑の実の味は、「郷愁」という情緒的な言葉で片付けるような甘美なものではなかったことが伺える。

信吉は、詩だけでなく散文作品でも桑の実の〈味〉について言及している。1991（平成３）年４月に刊行された『風色の望郷歌』の「帰命頂礼蚕影さま 蚕の由来を………　六月」の章において、信吉は次のように述べている。

春蚕がたけなわになるとドドメが紅紫色に熟れる。子供たちがそれを漁る。どこの桑原（桑畑のことを私たちは桑原と言った）の、どの種類のドドメが美味（うまい）か。子供たちはそれを知っている。（中略）懐かしいかなドドメ風景。しかし、ほんとのところ私はあまり喰べなかった。妹も下の弟もたくさん喰べたというのに、私はドドメの味覚や舌ざわりを好きになれなかった。今にしておもう、ドドメはうまいもんじゃないんだ[18]。

この引用においても信吉は、子供たちが「ドドメ」に親しんだことを回想しながら、自身はその味を好きになれなかったことを打ち明け、果ては「今にしておもう、ドドメはうまいもんじゃないんだ」と強い語調でその味を否定する。このように、繰り返し作品内で桑の実の味に言及し否定的な態度を貫いている点からは、信吉が桑の実から養蚕業の苦々しい思い出を想起していると考えることも不可能ではない。「ドドメ」の〈味〉を懐かしい思い出として片付けることができないほど、信吉にとって桑の実、ひいては養蚕が生活に密接に関わるものであったことが伺えるのである。

３つ目は、信吉が自身の人生を蚕に重ねた詩を残している点である。１つ目、２つ目の観点では、養蚕業やそれに伴う桑の実の味といった養蚕そのものを描写している作品について検討したが、信吉の作品にも、これまで見てきた作家と同じように、養蚕語彙が比喩として用いられている作品が見られる。1976（昭和51）年に刊行された『上州』に収められた「新年」という詩を次に引用する。

老人は飽きっぽいというが。
まったく以て
老年という奴に
飽き飽きした。

幼年があった。
少年があった。
青年があった。
壮年というのがあった。

そうして年齢段階の一段ごとにヤワい甘皮が剥げ落ちていったのに、

老人の行手は
老年ばかり。
うっかり皺っ面剥がせばこの世の外側だ。

シジ、
タケ、
フナ、ニワ。

昔の田舎で飼育した蚕は
そういう呼び名の四眠脱皮の夜をくぐった。

老年の夜は
何を
くぐる？
（中略）
そうだ。
脱皮不能に飽き飽きして、落葉の腐蝕土にもぐりこんで
おれは
新年寒しと
くしゃみする(19)。

この詩では、「老年」の立場にある語り手の幼年、少年、青年、壮年と年齢を重ねてきた人生が「シジ、タケ、フナ、ニワ」と呼び名を変えながら４回脱皮を行う蚕の生涯に例えられている。この比喩の様相は、これまでに挙げた他の作家が用いるものとは大きく異なっていると言えるだろう。信吉が人生の中で、蚕が脱皮を重ねる様子を実際に目にしてきたことが容易に想像できる描写である。語り手の人生が「蚕」の一生に重ねられて表現されることで、４回脱皮を行った蚕を待ち構えているものが〈死〉であることが想起され、語り手自身の先が長くないことを自覚しつつ、変化の起こらない日常を淡々と過ごす様子が強調される。さらに、自身の人生を「蚕」という卑小な虫の一生に重ね合わせる表現は、自身の老いを受け入れることの切なさを際立たせるものとなっており、語り手の自虐的な態度が見出せる。

このように、群馬県にゆかりのある作家の中から萩原朔太郎と伊藤信吉の作品を取り上げ、その様相を検討した。同じ故郷を持つ作家でも、生きた時代と生活環境の違いによって、作品に表れる養蚕語彙の描出の様相に大きな違いが見られた。

６．養蚕業の盛衰と文学作品の発表年代について

続いて、これまで見てきた用例の解釈を踏まえながら、養蚕業の盛衰の流れと文学作品の発表年や作家の生没年を重ね合わせることで、作品の解釈や文学者の養蚕に対する視点を検討したい。

本資料の最終ページに「日本全国における養蚕の推移と文学作品」の図を添付した。この図を踏まえながら、作品ごとに検討を行っていく。

まずは小林多喜二の「蟹工船」についてである。「蟹工船」が発表された昭和４年は、養蚕戸数・桑園面積がともにピークを迎えており、養蚕業の最盛期にあたると考えられる。蚕糸の需要が高まり養蚕農家が増加したこの時期は、儲けも大きい分、養蚕業の歴史の中で最も過酷な労働環境があったことが予測される。さらに、昭和初年代にプロレタリア文学が最盛期を迎えていたことを踏まえると、「蟹工船」において養蚕語彙が用いられたことは、作品内で〈労働〉の苦しみを表現し、それを読者と共有することに貢献していると考えられる。

続いて太宰治の諸作品の発表年代について確認する。本稿で取り上げた「東京八景」「皮膚と心」「令嬢アユ」の３作は昭和14年から16年にかけて発表されているが、データベースにおける太宰の他の作品の発表年も昭和10年代に集中している点に注目したい。昭和10年代は太宰治の心身が安定し、すぐれた作品を多く発表した時期であるが、社会情勢としては昭和12年に日中戦争、16年には太平洋戦争が開戦し混乱を極めた時期だと言える。養蚕業も最盛期を過ぎ、養蚕戸数・桑園面積がともに大きく下降していることが図から読み取れる。これを踏まえて用例を確認すると、いずれの例も養蚕語彙が肯定的な文脈では用いられていないことが確認できる。

戦争によってもたらされた混乱や養蚕業が衰退していく様子が作品の解釈と重ねられるのである。

最後に伊藤信吉についてである。先ほど言及したが、信吉自身が著作で「私が少年から青年へとそだっていった時期は、たまたま繭生産と生糸輸出の最盛期に併行していた[20]」と述べるように、信吉の人生が養蚕業の盛衰の歴史とほぼ重ねられることは図を見ると明白である。これを踏まえると、「新年」における蚕の生涯と自身の人生を重ねる表現は、蚕の生涯だけでなく、衰退していく養蚕業そのものを重ねて解釈することも不自然ではないだろう。

また、データベースにおける信吉の用例を見ると、昭和50年代以降に作品が集中していることが分かる。つまり信吉は、養蚕業がほとんど衰退しきった時期から精力的に養蚕についての作品を制作しているのである。幼少期から桑や蚕に親しみ、産業として全盛期を迎えやがて衰退するという養蚕業の歴史の流れを間近で体感してきた信吉が、自身も年齢を重ね老いを受け入れる時期に養蚕の記憶を作品に残したことは象徴的であり、この年齢と養蚕業が衰退した状況になってようやく産業としての養蚕を客観的に描写できるようになったことが想像されるのである。

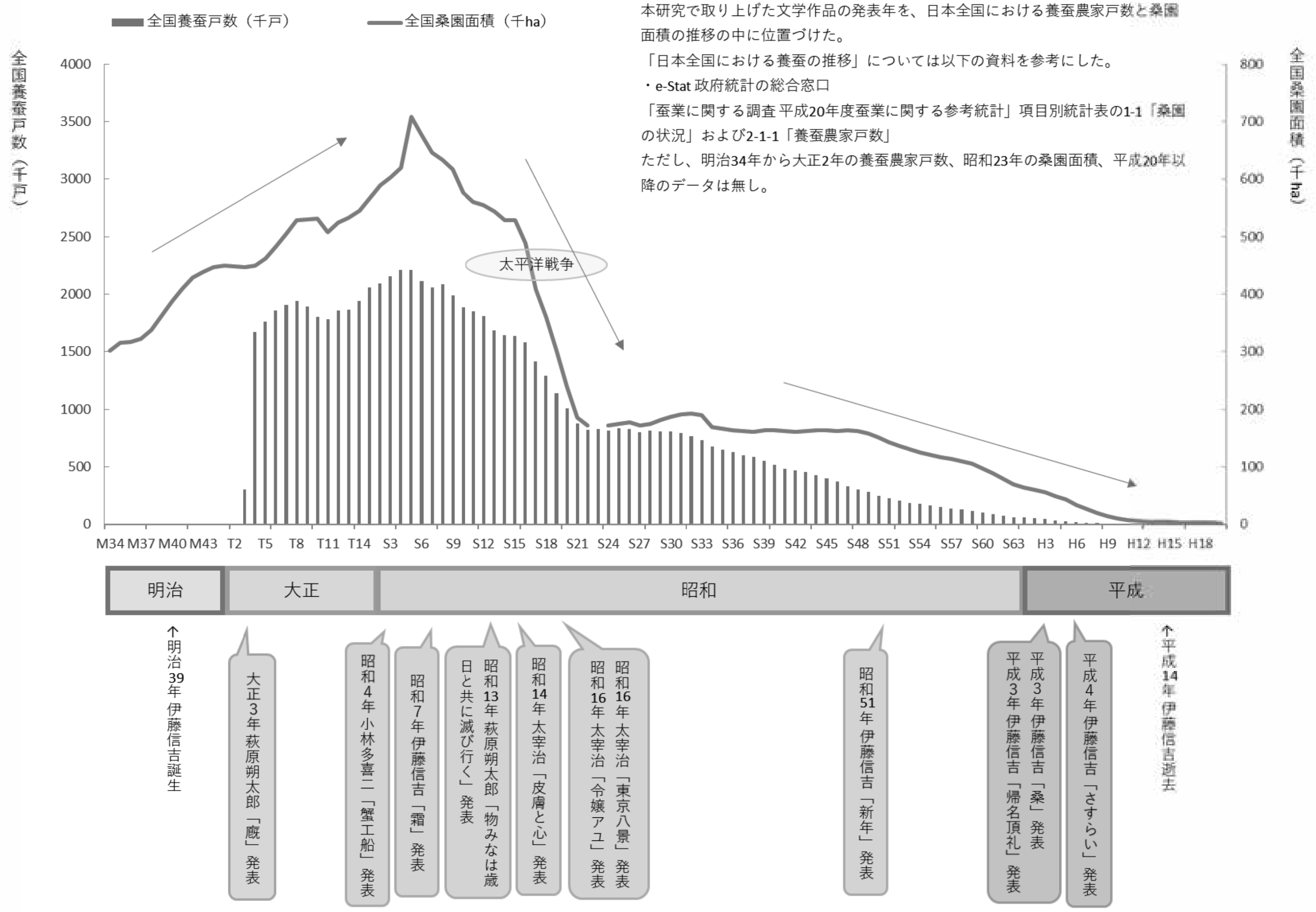
７．おわりに

以上のように、近現代文学における養蚕語彙の用例を収集し、その描出のありようを検討した。文学における養蚕語彙を検討することは、養蚕をはじめとする絹文化が人々の〈日常〉にどのように根付いていたのかを検討できると同時に、養蚕語彙が持つイメージによって文学作品の解釈を深めることができると言える。

今後の展望としては、作品のさらなる収集と検討を重ねることは勿論のこと、群馬県外の養蚕業の実態を詳しく調査することで、それぞれの土地に関わる作家の作品の解釈を深めることが必要であると考えられる。実地調査等を行うことで、群馬県とそれ以外の地域の差別化を図ることを今後の課題とする。

注

（１）青空文庫における用例検索には「Aozorasearch　青空文庫全文検索」を用いた。（URL：https://myokoym.net/aozorasearch/）最終閲覧日：2021年１月14日
（２）伊藤信吉の作品の用例は、『上州おたくら　私の方言詩集』（思潮社　1992年９月）、『風色の望郷歌（上）（下）』（煥乎堂　1991年４月）および『伊藤信吉著作集　第７巻』（沖積舎　2003年10月）を用いて収集を行った。
（３）『蟹工船・党生活者』新潮社　初版：1953年６月
（４）「蟹工船」における養蚕語彙を用いた比喩表現については、新井小枝子による『シルクカントリー双書九　絹のことば』（上毛新聞社　2012年）での考察がある。新井は、その比喩表現において、「作業の過酷さ」や「劣悪な労働者のありよう」を描き出している点を指摘している。
（５）『蟹工船・党生活者』新潮社　初版：1953年６月
（６）『走れメロス』新潮社　改版：2005年２月
（７）『きりぎりす』新潮社　改版：1974年10月
（８）『ろまん燈籠』新潮社　改版：1983年３月
（９）『萩原朔太郎全集　第三巻』筑摩書房　初版：1977年５月
（10）『萩原朔太郎全集　第二巻』筑摩書房　初版：1976年３月
（11）「萩原朔太郎年譜」前橋文学館ホームページ（URL：https://www.maebashibungakukan.jp/sakutaro）最終閲覧日：2021年１月14日
（12）「水防・治水の歴史」利根川下流河川事務所ホームページ（URL：https://www.ktr.mlit.go.jp/tonege/tonege_index16.html）最終閲覧日：2021年１月14日
（13）利根川の氾濫と桑の栽培の関係は引き続き調査が必要である。
（14）『風色の望郷歌（上）』煥乎堂　初版：1991年４月
（15）『伊藤信吉著作集　第七巻』沖積舎　初版：2003年10月
（16）『上州おたくら　私の方言詩集』思潮社　初版：1992年９月
（17）『上州おたくら　私の方言詩集』思潮社　初版：1992年９月
（18）『風色の望郷歌（上）』煥乎堂　初版：1991年４月
（19）『伊藤信吉著作集　第七巻』沖積舎　初版：2003年10月
（20）『風色の望郷歌（上）』煥乎堂　初版：1991年４月

日本全国における養蚕の推移と文学作品

本研究で取り上げた文学作品の発表年を、日本全国における養蚕農家戸数と桑園面積の推移の中に位置づけた。
「日本全国における養蚕の推移」については以下の資料を参考にした。
・e-Stat 政府統計の総合窓口
「蚕業に関する調査 平成20年度蚕業に関する参考統計」項目別統計表の1-1「桑園の状況」および2-1-1「養蚕農家戸数」
ただし、明治34年から大正2年の養蚕農家戸数、昭和23年の桑園面積、平成20年以降のデータは無し。